
笑顔の理由

珈琲ミルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔の理由

【Nコード】

N1600M

【作者名】

珈琲ミルク

【あらすじ】

小さい時に養女として迎えられた女の子。兄妹はもちろん家族は仲良く楽しく暮らしていた。

でも特別な感情も芽生えていた…。

プロローグ 「1」 (前書き)

初めて小説を書きます。下手かもしれませんが暖かい目で見守って下さい。

プロローグ 「1」

出会いは突然だった。

目の前には両親に連れられて女の子がいる。
馴れない所に戸惑っているのか少し不安そうに見えた。

「ほら優太、今日から家族になる子だよ。」

不意に父さんが言った。「この子は養女として私たちの家族になるの。優太、あなたはお兄ちゃんになるのよ。」
母さんは嬉しそうに話した。

「ヨウジヨってなに？」当時まだ5歳のオレにはよくわからなかった。

「ハハ、わからなくてもいい。ただ家族になるという事だ。」

「そうよ。仲良くするのよ。」

父さんたちは楽しそうに話した。

「おっと、自己紹介がまだだっな！ほら優太、父さんたちはもうしたから自己紹介しなさい。」

父さんはとにかく浮かれている。

「え〜っと、ボク優太！5歳だよ。」

なぜか緊張してぎこちない自己紹介だった。

「じゃあ、あなたも自己紹介して？」

母さんは微笑みながら女の子に話しかけた。

「美夏です。3歳です。よろしくお願いします。」

まだ、戸惑っているのか不安な表情をしているのが子どもながらにわかった。

「よろしくね！美夏ちゃん！！」

最大限の笑顔で迎えようと子どもながらにそう思った。

「うん！！」

たった一言だけで美夏は笑顔で返事をしてくれた。

「いい家族になりそうね！」

「そうだな。」

父さんたちも笑顔で楽しそうだ。

プロローグ 「2」

幼い時に両親を亡くした。交通事故だった。当時の事はまだ幼く全くといって記憶にない。私が助かったのは奇跡に近かったらしい。預け先がなかった私は孤児院に引き取られる事になった。幼すぎた私にとって全く知らない人達の所で生活するのはとても辛かった。特に誰とも話す事は無く静かに生活していた。

出会いは突然だった。孤児院に訪問に来ていた男女二人組が私を養女にしたいといってきた。孤児院の人達もその方が幸せだという事で話は進んでいた。

「美夏ちゃん！私、水澤葵^{あおい}。よろしくね！！」
とても綺麗な女性が話しかけてきた。

「僕は、水澤瑛志^{えいじ}。これからよろしくね！！」 とても優しいような人が話しかけてくれた。

「ほら、美夏ちゃん挨拶して？」

「……よろしく…おねがいします。」

「ちゃんと挨拶できるなんてエライね。」

女の人が微笑みながら頭を撫でてくれた。

ただ単に嬉しかった。

打ち解けるまでに時間はかからなかった。二人が孤児院を訪れる度に二人に会うのが楽しみになっていた。

孤児院を出る日はそう遠くなかった。

孤児院を出る日、前から聞かされていた私より2歳年上の男の子。会うのに不安はあったけど楽しみの方が大きかった。家に着くと男の子が出てきた。3人が軽い会話をしたあとパパが男の子に自己紹介しろと言った。

「え〜っと、ボク優太！5歳だよ。」

今度はママが私に自己紹介しろと言った。

「美夏です。3歳です。よろしく願います。」

ママは自己紹介できた事に頭を撫でて誉めてくれた。

「よろしくね！美夏ちゃん」

優しい笑顔で私を迎えてくれた。

「うん」

笑顔は自然と出てきた。家族という愛に、人の温もりを感じた瞬間だった。

第1話：始まる生活

チリリリリッ！！

「うーん……眠い…もう少し寝よ」

「優ちゃん起きて！！」

「……ムリ」

「そんな事言っでないで。今日から学校なんだから」

「わかったわかった。起きるって」

「じゃあ下にいつてるね」

俺の名前は水澤優太。中学3年。バスケット部。成績は中の下。趣味は絵を描く事。

今、起こしに来たのは妹の美夏。妹といっても義理だけど。美夏も今年で中学1年。長いようであつという間だ。

寝起きの重たい足を引き吊りながら部屋を出て下に行く。

「優太、おはよう。早く支度しなさい。朝ご飯はもう出来てるからね。」

「フアゝおはよう母さん。」とりあえず制服に着替える。

「優ちゃん早く朝ご飯食べようよ」

「美夏まだ食べてなかったのか！？早く食べりゃあいいのに。」

「優ちゃんを待ってたんだよ」

「そっか、ごめんな待たせて。」

「全然いいよ それより早く食べよ？」

「オウ。それにしても美夏浮かれてんな。なんかあのか？」

「だって今日から中学生なんだよ 浮かれずにはいられないよ」
美夏は満面の笑みでそう言った。

「最初だけだよ。今なんてもうめんどくさくて。」

「今が楽しければいいの。」

美夏は本当に嬉しそうに話しているのでこっちもつい笑ってしま

う。

「それより今日は半日なんですよ？」

母さんが聞いてきた。

「そうだった。ラッキー？早く帰って寝よつと」

「そんな事よりお昼は自分たちで何か作ってたべてね。」

母さんはお願ひねと微笑みながら俺たちに言った。

「「はぁーい」」

「さて、支度も終わつた事だし行くか。」

「うん」

美夏は楽しそうに返事をした。中学1年にしては可愛く育つたような気がする。そんな事をふと思つてしまう。

学校までの距離はそれほど遠くなく歩いて15分くらい。けつこう近くて嬉しかったりする。

通学路を歩いていると他の生徒も見かけ楽しそうに歩いている。ま

あ田舎の学校だから生徒なんてそんなにいないけど。

「……ちゃん、優ちゃん！」

「どッどうしたんだよ急に！？」

「どうしたじゃないよ。ずっと話しかけてるのに考え事なんかして！」

「ごめんごめん。でなんの話？」

美夏は少しふてくされつつも

「今日、帰ったら遊ぼうよ」

ふてくされてるかと思つたら一気に笑顔になった。

「ああ、いいよ。帰つたらなんかしような。」

笑つて言つと美夏はとても嬉しそうに返事をした。そうこうしているうちに学校に着いた。

「じゃあ美夏、俺こつちだから」

「うん。また後でね。優ちゃん」

美夏は大きく手を振りながら教室へ向かって行つた。

俺も教室に向かつて歩き出す。3年の教室は奥にあるので行くのがめんどくさい。まあそんな事を考えながら歩いていると教室にたどり着いた。教室のドアを開けると／＼「オッス優太！元氣してたか！？」

今、俺に話しかけてきたのは斎藤和樹。俺の一番の親友だ。

「まあまあだなあ。カズは？」

俺はカズって読んでいる。

「ヒマだったな！部活とかやってねーし、する事無かったし。」

カズは部活をやっていない。運動神経はいいのに。それに結構なイケメンで馴染みやすい性格から生徒たちからの憧れや信望も強かったりする。

「そうか。それはつまらなかっただろう。：グスツカズは寂しい春休みを送っていたんだな。」

「やめろツ！その哀れみの目を」

カズは少し恥ずかしそうにしている。

「わかつたわかつた」

「ところで優太」

「ん、なに？」

「美夏ちゃん今日から1年生なんだろ！？」

カズが聞いてきた。

「ああそうだよ。おかげで朝から浮かれ気分だよ」

「そうなんだ。でもいいよなあ？優太は」

カズがニヤニヤしながら言ってきた。

「なにがだよ？」

「あんないい妹がいて」

カズはさらにニヤニヤしながら言ってきた。

「妹っていつでも義理だけだな」

「そんな事どうでもいいじゃん」

どうでもいい事じゃないだろ。つーかいつまでニヤニヤしてんだコイツ！？「おーいもうすぐ始業式始まるから廊下に並べ。」担任がクラスにいる生徒達に呼びかけた。

廊下に並び体育館までの道のりを男女二列、背の順で歩いている。

「なあ優太」

ちなみにカズはオレの後ろだ。

「なに？」

「始業式ってなにやんの？」

「校長の話とかじゃね」の

「えー校長の話かよ！あいつムダに話なげーからケツ痛くなんだよな。」

大きな声でよくそんな悪口を言えるもんだ。まあたしかにあの校長の話をみんながやだがつているのは事実だ。

そうこうしているうちに体育館に着いた。学年ごとに右側から並んでいく。

「全校生徒、起立して下さい。」

先生が言った。

教頭先生がステージ真ん中の辺りまでくると、礼をしてから

「これから始業式を始めます。」

もん一度礼をしてからステージを降りていった。

始業式の大半を終えるとあとは校長の話だけだ。

「校長先生のお話」

先生が言ったあと校長先生がステージに登った。

「始まるぜ。長い話が」

カズは本当に嫌そうだ。

校長の話は障がい者の事についてだった。まともに話を聞いている奴なんて数人しかいないだろう。

「これで始業式を終わります。3年生の方から退場して下さい。」

考え事している間にいつの間にか終わっていた。

教室に戻るとHRを始めた。

「えゝ今日はもう下校になるがあまりふざけすぎないように。以上！」

担任の話はすぐ終わるから大好きだ。

「先生さようなら」

生徒達が担任に挨拶して次々と帰って行った。

「じゃあオレも帰るかな。じゃあねゝ優太」

「オウ！じゃあね」

カズは浮かれて走って帰って行った。

「さて、オレも帰るかな。」

教室を出て玄関に向かう。靴を履き替え玄関を出る。少し歩き校門を出ようとするすると美夏が待っていた。

「もうゝ優ちゃん遅い？」

「なッ美夏、お前オレの事待ってたのか！？」

「そうだよゝ。まったく何分待たせるつもり？」

「美夏、お前友達と帰ればよかったのに。」 「私は優ちゃんと帰ってたの！！ もういい帰る。」

美夏は怒って歩き出して行った。

「ちょ ちよつと待てよ。美夏！あんな言い方して悪かった。待っててくれてありがとう。ごめんな。」

オレは美夏に駆け寄って言った。

「べ 別に怒ってないからいいよ。」

「そうか。ならよかった。ほら、待たせたお詫びにカバン持ってるよ。」

オレは美夏に手を差し出した。

「いいいいよ。自分で持つから。」

「いって！重たいだろ」

美夏の手からカバンを取る。

「／／ありがとう」

美夏は照れくさそうに言った。

家までの帰り道、美夏はとてもご機嫌で横に見える横顔はとても楽しそうで少し赤みがかつていた。

オレも自然と笑顔がこぼれていた。

第2話：午後の幸せ（前書き）

本当に下手ですが暖かい目で読んで頂けると嬉しいです。

第2話：午後の幸せ

「ただいま」

二人声を揃えて家に入る。

「あゝ腹減った」

「ご飯どうする？」

昼ご飯は自分たちで作るため何を食べるのか美夏が聞いてきた。

「まあとりあえず着替えてから考えようぜ」

オレがそう言うのと美夏は2階に上がっていった。美夏に続いてオレも2階に上がり自分の部屋に入る。部屋着に着替えて下のキッチンに向かう。「うゝんたいした物ないな」

冷蔵庫の中身の素っ気なさについて言葉がこぼれてしまう。昼ご飯を考えていると美夏が2階から降りて来た。

「なんかあった？」

美夏は食べる物はあるかと聞いてきた。

「特になんもないや。適当にチャーハンかな。」

オレが比較的な楽な料理を言っていると美夏は

「チャーハンかゝ！でもおいしいから全然いい」

美夏はさつきからご機嫌なせいかいつもなら「えゝチャーハン」などとだだをこねるのに今日は嫌がるどころかむしろ嬉しそうだ。

「どっち作る？」

オレがそう聞くと美夏は笑いながら

「一緒に作ろうよ。ね」

と満面の笑みで言ってきた。そんな顔で言われたら断るにも断れないし、すごく照れくさくなる。

お互い料理が得意な事もあってスムーズに進みチャーハンはすぐできた。

「んゝおいしそう！早く食べよ。」

待ちきれないのか美夏はもうすぐに食べる準備をしている。皿に盛りつけ一通り終わったら二人で食べ始めた。

「おいしい〜！やっぱ私たち天才だよね！？」

「当たり前！」

二人でそんなふう調子にのりながら楽しく昼を過ごした。

昼ご飯を食べ終え、食器を流しに持って行く。「あゝ洗うのめんどいな〜」

オレがそんな事を言つと美夏が

「じゃあ私が洗つてあげる」

美夏はとても楽しそうに言ってきた。

「みッ美夏、お前さっきからご機嫌すぎないか！？普段ならめんどくさがつてやらないのに！」

オレはあまりにも驚いて美夏にそんな事言つと美夏は

「別にいいでしょ！それなそんな事言つたら洗つてあげないよ！」

「ごごめん。ありがとう。」

オレは戸惑っていた。

「よろしい。今、洗うからちょっと待つてて」

美夏は食器を洗い始めたので俺はリビングでテレビを見ていた。

5分か10分くらいすると洗い物が終わつたらしく

「ふ〜疲れた〜」

などと言いながらリビングに来た。

「なんかヒマだね〜。」

「そうだな。」

「もう優ちゃん！ちゃんと答えてよ！！」

「なんか眠くなつてきた」

オレは眠くなり、ともに答えなかった。

「え〜そんなのつまんないよ〜優ちゃん！」

美夏はちよつと寂しそうに言ってきた。

「ん〜じゃあなんかやりたい事あんの？」

「ん~~~~」

特に何か浮かんで来ないのか美夏は悩んでいる。

「ん~~~~」

そこまで何かしたいのか美夏は悩み続けている。さすがに可哀想に思えてきてオレは自分から美夏話かけた。

「ん~~~~じゃあゲームでもするか？」

オレの一言で美夏の暗くなりかけた顔はとても明るい表情になった。

「うんッ」

「じゃあなんのゲームする？」

オレは自分が持っているゲームの中で何をしたいか聞いてみた。

「え〜っと あッそうだ！この前優ちゃん買ったゲームやる」

美夏は楽しそうに言ってきた。

「美夏、あのゲームRPGだぞ」

「うん」

「一人用なんだぞ」

「うん だから優ちゃんがやってるところを見る」

「それ 面白いのか？」

「優ちゃんとやればすごく楽しいよ」

首を傾げながら満面の笑みで言ってくるからつい

「まあ美夏がいいならそれでいいか」

なんて美夏のペースにのせられ俺も少し笑いがこぼれる。ゲームの本体に電源を入れゲームをセツトする。少し待てばゲームのOPが流れ始めた。

「へえすごいね！OPなんかもあるんだ！」

美夏はほとんどゲームをしないからとても驚いている。

「さて、始めるか」

俺はゲームを始めると何時間かぶつ通しでやってしまう。美夏は攻略本を見ながらとても楽しそうにしている。二人でゲームの事を話ながら1時間ちよつと経つと美夏は言葉数が減ってきた。

「美夏、眠いのか？」

「ううん、大丈夫」

明らかさつきより元気がない。

「眠いなら寝ろよ」

俺がその言葉をかけると美夏は

「眠くないもん」

なんて言いながら寝ないように頑張っていた。

さらに1時間経つと美夏は完全に眠ってしまっている。風邪を引くと大変だから部屋から毛布を持ってきて美夏にかけた。

「ふゝまったく今日はすごいご機嫌だったな。それにしても 美夏」

俺はその後の言葉を言う事を止め、赤くなった顔を隠すようにトイレに行った。

今は夕方の6時30分。美夏はまだ寝ている。俺はテレビを見ている。少し経つと

「んゝ あッ！あたし寝ちゃったゝ」

いきなり起き出した美夏はとても残念そうに言った。

「よく寝てたな」

俺はいじわるっぽく言った。

「優ちゃん起こしてよゝ」

美夏は少し怒りっぽく言ってきた。

「せつかく熟睡しているとこ起こすの悪いだろ？」

「そうだけど…」

「いいじゃん別に。昼寝したぐらい」

「だってせつかく優ちゃんと遊べたのに…」

美夏の表情は少し暗くなった。

「またいつでも遊べるだろ」

オレは明るく言った。

「…いつでも遊べないじゃん。優ちゃんまた部活始まったら忙しくなっちゃうじゃん。」

美夏はとても寂しそうにつばやいた。

「じゃあ夜、遊ぶか オレも昼寝したから夜寝れないしな」

オレは美夏に対して初めてウソをついた。

「ホント！じゃあ夜、優ちゃんの部屋に行くね」

美夏の表情が明るくなった気がした。

「ただいま。」

疲れた声を出しながら母さんが帰って来た。美夏は玄関に向かって楽しそうにかけていった。

「おかえりママ」

「ただいま。なんかえらくご機嫌ね!？」

「そんな事ないよ」

言葉とは裏腹に美夏はとても楽しそうだった。母さんもその事に気づいているようだ。

「そう。ねえ美夏、夕飯作るの手伝ってもらえる？」

「うん、いいよ」

美夏はさっきまでの暗さはウソのように母さんとキッチンに向かって行った。

第3話：夜の幸せ（前書き）

短めですがどうぞご覧ください。

第3話：夜の幸せ

夕飯を食べ終え、少しテレビを見て俺は立ち上がった。

「よっこらせっと」

「あら優太どうしたの？」

「ん 部屋行くわ」

「そう。ねえあなたお酒飲まない？」

特に興味はないのか母さんはすぐに父さんに話しかけた。

「おッ！いいね。一杯やろう」

母さんに誘われたのか父さんはすごく嬉しそうだ。父さんと母さんはいまだに仲良くラブラブだ。年をとってもお互いに好き同士でいられるのは息子として人として尊敬する。

リビングを出て廊下を歩き階段を登り自分の部屋を目指す。

部屋に着き特に何もせずもうすぐ来るであろう美夏を待っていた。少しすると階段を登る音がした。

「優ちゃん」

「おう。入っていいよ。」

美夏は部屋に入って来ると座る場所に迷いつつもオレの向に座った。

「で何すんの？」

特に何をするか決めてなく、オレは美夏に聞いて見た。

「んゝお話？」

「なんだそれ！！」

「優ちゃんと色々話したいな」

美夏は楽しそうに真面目に言ってきた。

「まあ美夏がいいならいいけど」

「うん」

美夏はニコニコしている。

「美夏、お前部活決めたか？」

「うん、まだ。」

「そっか」

「うん。別に強制じゃないし入らなくてもいいかなあって」

「まあムリして入る事もないからな」

美夏は特に入りたい部はないみたいだ。

「お前、友達はどうなの？」

「友達？できたよ。特に絵梨ちゃんて子とスゴくきがあうの」

「そうなんだ。良かったじゃん！」

美夏の楽しそうな雰囲気は感染するのかオレも楽しい雰囲気になつてきた。

美夏との会話は時間を忘れるくらい楽しいと改めてわかった。でも実は昼寝をしていないため眠気が出てきた。

「優ちゃん眠いの？」

「ん 大丈夫だよ。」

「眠かったら寝てもいいよ」

「ありがとう。でもまだ大丈夫だから話続けていいよ」

眠気に頑張つて打ち勝とうと笑つて美夏に言った。美夏は話を続けているけどオレはいつの間にか眠ってしまった。

気がついたら夜中だった。毛布がしっかりかかっているという事は美夏がオレにかけてくれたんだろう。

「ありがとう。美夏」

オレはそうつぶやきまた眠りについた。

第3話：夜の幸せ（番外編）（前書き）

美夏視点です。

第3話：夜の幸せ（番外編）

優ちゃんが2階に行って10分が経ったくらいのところで私も立ち上がる。

「あれえゝ美夏も2階行くの？」

ママは少し酔っている。

「うん」

「そうなの。ねえあなた」

ママはパパに話しかけパパに甘えている。仲むつまじい2人の姿は私にとって憧れ。

優ちゃんの部屋までの短い道のりを私は緊張しながら歩いていた。

“コンコン”

私はノックした後、優ちゃんの返事を待つて部屋に入った。最初どこに座ろうか迷ったけど優ちゃんの顔が見えるように向に座った。私は何かして遊びたいわけじゃなくただ優ちゃんと話したかったから正直に言った。優ちゃんは優しくして私がやりたい事は嫌な顔せずやってくれる。その優しさがスゴく嬉しい。優ちゃんが話題をくれるから自然と話はどんどん出てきた。

何時間か話すと優ちゃんは眠そうだった。私は「寝てもいいよ」って言ったけど優ちゃんはムリしているようだった。

「ムリしなくていいのに」

聞こえないような小さな声で私はつぶやいた。少しすると優ちゃんの寝息が聞こえてきた。

私は思うよりも先に体が動き、優ちゃんの隣に座って優ちゃんの寝顔を見ていた。

「優ちゃん…」

私は優ちゃんの寝顔を見ながら昔の事を思い出していた。

私はそもそも内気で特定の人としか話せなかった。でも小学校に入る前優ちゃんと話している時に

「ワハハッ！！優ちゃんおもしろい」

「…美夏ちゃん。美夏ちゃん的笑顔スゴくかわいいよ！」

優ちゃんは私にそんな事言ってきたけど私は少し疑った。

「ホント？」

「うん スゴくかわいい！その笑顔だったらすぐにたくさん友達できるよ！」

優ちゃんの嘘一つない笑顔と共に言葉が私の疑いをどこかに吹き飛ばした。

「うれしい ありがとう優ちゃん」

私は優ちゃんの言葉を信じて小学校に上がるとたくさんの友達ができる。

横で無邪気に寝る優ちゃんを見て私は、優ちゃんの頬に触れた。

「優ちゃん…」

私は吸い込まれるように優ちゃんの唇に‘キス’をした。唇が離れた後私は急に恥ずかしくなって立ち上がった。わずかに残る唇の感触を味わっていた。

私は優ちゃんが風邪を引かないように毛布かけた。私は部屋を出るとき寝ている優ちゃんに向かって

「優ちゃん、大好き」

その日の夜は今までで一番幸せで私にとって決して忘れる事のない“特別な日”になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1600m/>

笑顔の理由

2010年10月19日21時28分発行